

# 中古文学資料解題③

星 瑞穂

はじめに

本稿は、『北の丸』第五〇号に掲載した拙稿「中古文学資料解題②」に続くものである。

当館所蔵の資料のうち、平安時代に成立した文学作品（中古文学）および後世に成立したその注釈書について紹介するものである。当館には多くの写本・版本が所蔵されているが、広く一般の利用に供するため、書誌情報・作品解説を加えて掲載する。

今回は『改訂 内閣文庫国書分類目録』から「国文」の項目に挙げられている資料のうち、平安時代に成立したもので、およびその注釈書類を抽出して調査した。なお、このうち挿絵を伴うものについては、すでに『北の丸』四五号（平成二五年）〜五〇号（平成三〇年）に「当館所蔵の「絵入り本」解題①〜⑥」として紹介した。

【九五】雨夜物語たみこと葉 安永六年刊 二冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇三七」

本資料は加藤宇万伎（美樹）の手による『源氏物語』の「帚木」の注釈書『雨夜物語たみこと葉』の安永六年版である。袋綴。二巻二冊。

『北の丸』第51号 中古文学資料解題③

本資料は『源氏物語』のうち、「帚木」の「雨夜の品定め」の場面に注釈を施したもので、序文によれば、娘たちに『源氏物語』を学ばせたいと考える「ある人」のために作り、送付したものであるという。師である賀茂真淵の『源氏物語新釈』を基に、頭注・傍注を施し、主語を補うなど、初学者向けに工夫された版面である。本文部分は每半葉七行、字高一四・七糎。頭注部分は高さ六・五糎で、見易く工夫している。書名は「雨夜の品定め」の俗語訳。

宇万伎は宝暦末年から大番与力として大坂城・二条城に勤番した。上田秋成の入門を受けたのは、明和三年から四年頃のことと、本資料の序文も秋成が寄せている。二条城在番中に没するのは安永六年のことと、本資料は死の直前に刊行されたものと想像される。

本資料は、明治一二年に政府が購入したものである。それ以前の来歴については不明。

【書誌】

外題・「雨夜たみこと葉 上(下)」中央無地料紙題簽(一八・二糎×四・

〇糎)に墨書

内題・なし

表紙・縹色布目型押表紙(二五・〇糎×一八・〇糎)

料紙・楮紙

匡郭・四周单边(二一・三糎×一五・〇糎)

行数・毎半葉七行

字高・一四・七糎

墨付丁数・①三五丁、②三三丁

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十二年購求」

【刊年・刊行者】

第二冊目の裏見返しに刊記あり。

「安永六丁酉年初夏／出雲寺文治郎／風月庄左衛門／吉田四郎右衛門／梅村三郎兵衛」

いずれの書肆も京の版元である。

【九六】校正釈注源氏物語評釈 文久元年刊 一三冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇三九」

本資料は萩原広道の手による『源氏物語』の注釈書『源氏物語評釈』の版本。全一三冊。袋綴。

『源氏物語評釈』は、首巻総論二卷二冊、「桐壺」から「花宴」までの本文注釈八卷八冊、語釈二卷・余釈二卷三冊の構成を採る。「夕顔」の末尾には嘉永六年の刊記があり、のちに追加された「余釈」には文久元年の年記がみられ、段階的に編集・出版されたことがうかがわれる。「余釈」の記載によれば、病によって編集が中断していたようである。

『源氏物語評釈』は先行する『源氏物語玉の小櫛』や『紫女七論』にも批評を加え、国学が中心となって担った江戸時代の源氏物語研究の集大成的な性格を持つ。『湖月抄』以前を「旧注」、以降を「新注」とした用語が見れるのも本書からである。

萩原広道は平賀元義らに和歌の教えを受け、大坂歌壇の歌人として活躍した。それと同時に本居宣長に私淑し、国学者として多くの著作を残している。幕末の勤皇運動には批判的であったとされる。病がちであったらしく、文久三年に四九歳で没した。

本資料は昌平坂学問所の旧蔵書。表紙と最後の丁に「昌平坂学問所」の墨印がみられる。表紙には併せて「新刊納本」の墨印が捺されている（内閣文庫の蔵書票が上から貼付されているため一部欠）。これは昌平坂学問所で新収資料に捺したもの。各冊末尾には朱書で「文久癸亥」とあり（但し本来は朱印を用いる）、文久三年に新収されたものと想像される。

【書誌】

外題・「源氏物語評釈」左肩四周双边刷題簽（二八・七糎×三・八糎）

内題・「校正釈注源氏物語評釈」

表紙・緑色表紙（二五・八糎×一八・七糎）

料紙・楮紙

匡郭・四周双边（二一・八糎×一五・三糎）、①～⑬有界

行数・本文毎半葉一一行、頭注毎半葉二五行、語釈・余釈毎半葉一〇行  
字高・二一・八糎

墨付丁数・①四七丁、②四三丁、③三三丁、④六九丁、⑤一四丁、⑥五八丁、  
⑦五七丁、⑧四三丁、⑨四〇丁、⑩一八丁、⑪三二丁、⑫五七丁、⑬三二丁

印記・「大学蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」「昌平坂学問所」「新刊納本」

【刊年・刊行者】

第一冊目の見返しに、黄檗色地の刊記あり。

「萩原先生著／初帙八冊／校注／釈注／源氏物語評釈／鹿鳴草舎塾蔵」  
（「校注／釈注」は角書）

第七冊目の見返しにも同じ刊記があるが、地色は縹色。  
第六冊目五八ウに刊記あり。

「嘉永六年癸丑新刻／鹿鳴草舎蔵板」

【九七】校正積注源氏物語評釈 文久元年刊 一三冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇三八」

本資料は萩原広道の手による『源氏物語』の注釈書『源氏物語評釈』の  
版本。全一三冊。袋綴。前掲資料と版は同じだが、刊記の書肆の記載が異  
なる。後刷か。題簽は前掲資料と同じ版だが、表紙は異なっている。

本資料は明治一二年に政府が購入したもの。旧蔵者の朱印と思われるも  
のが二つ（正方陽刻印一・五糎×一・五糎、正方陽刻印一・七糎×一・七  
糎）、各冊の最初の丁に捺されているが、来歴についてははっきりしない。

なお、第六冊目の刊記には「鹿鳴草舎」の朱印がある。

冊時番号に誤りあり。第一一冊目と第十二冊目が反対。

【書誌】

外題・「源氏物語評釈」左肩四周双边刷題簽（一八・七糎×三・五糎）

内題・「校正積注源氏物語評釈」

表紙・緑色唐草文様艶出表紙（二五・八糎×一八・二糎）

料紙・楮紙

匡郭・四周双边（二一・八糎×一五・三糎）、⑪～⑬有界

行数・本文每半葉二一行、頭注每半葉二五行、語釈・余釈每半葉一〇行

字高・二一・八糎

墨付丁数・①四八丁、②四二丁、③三三丁、④六九丁、⑤一四丁、⑥五八丁、

⑦五七丁、⑧四三丁、⑨四〇丁、⑩一八丁、⑪五七丁、⑫三二丁、⑬三一  
丁

印記・「明治十二年購求」「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

第六冊目五八ウに刊記あり。

「嘉永六年癸丑新刻／鹿鳴草舎蔵板（朱印）」

同裏見返しには

「萩原鹿蔵著述／江戸下谷御数寄屋町／発兌書林 岡村屋庄助」

とある。

また第七冊目の見返しには、縹色地に刊記が印刷されている。

「萩原先生著／初帙八冊／校注／積注／源氏物語評釈／鹿鳴草舎塾蔵」

第一三冊目の裏見返しには以下の通り書肆の記載がある。

「書林／京都寺町通仏光寺 河内屋藤四郎／江戸日本橋通老丁目 須  
原屋茂兵衛／同 式丁目 山城屋佐兵衛／同 式丁目 須原屋新兵衛／同  
南伝馬町老丁目 山城屋政吉／同 下谷御成道 英文蔵／同 大伝馬町式  
丁目 丁子屋平兵衛／同 芝神明前 岡田屋嘉七／同 和泉屋吉兵衛／大  
坂心齋橋筋本町角 河内屋藤兵衛／大阪心齋橋筋博労町角 河内屋茂兵  
衛」

【九八】「源氏論議」江戸時代初期写 一冊

林羅山旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇五六」

本資料は『源氏物語』の注釈書のひとつ『弘安源氏論議』の写本である。  
全一冊。袋綴。

『弘安源氏論議』は、弘安三年に伏見天皇の東宮時代に行われた『源氏物語』の問答を、源具頭が筆録したものである。「論議」とはそもそも僧によって行われる仏典解釈の討論のことで、この形式をそのまま『源氏物語』の解釈に用いた。八名の参加者（序文によれば、左方に飛鳥井雅有・高倉範藤・持明院長相・源具頭、右方に藤原康能・藤原兼行・藤原為方・藤原定成）にそれぞれ二題ずつ出題され、左右で計一六番の問答となっている。題は有職故実、語釈、引歌など。各番に判が付され、左方の優勢となる。『源氏物語』研究の初期に位置する資料で、当時の議論の状況や、享受の仕方、それまでの研究史など多くのものを記録している。

本資料は林羅山の旧蔵書。江戸時代初期の書写であることが想像される。のち昌平坂学問所に収蔵された。「内閣文庫本」として知られる貴重な写本である。

【書誌】

外題・「源氏論議」左肩打付墨書

内題・なし

表紙・香色表紙（二五・七糎×一九・六糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一〇行

字高・二〇・〇糎

墨付丁数・二六丁

印記・「昌平坂学問所」「林氏蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」「江雲渭水」

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。

【九九】弘安源氏論議 明和四年写 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇五五」

本資料は『源氏物語』の注釈『弘安源氏論議』の写本。袋綴。一冊。前掲資料と同様『弘安源氏論議』の写本だが、寛文元年版からの書写と考えられる。宝暦六年の年記を持つ萩野広道の前文を持ち、また頭注を持つ点が、前掲資料とは大きく異なる。また見返し及び本文部分に、黄檗色の唐草文様の帯が上下に刷られている。

本資料は和学講談所の旧蔵。

【書誌】

外題・「弘安源氏論議」左肩四周双边刷題簽（一八・二糎×四・二糎）に墨書

内題・なし

表紙・浅葱色表紙（二六・二糎×一八・七糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉二二行

字高・本文一八・〇糎、頭注四・八糎

墨付丁数・七丁

印記・「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」「和学講談所」

【写年・書写者】

一ウに前文について以下の通り記載あり。

「宝暦六年十二月記之／広道／此前書並頭書紫墨以取書付今常墨を用ゆ

／義休」

七才に寛文元年版の元奥書あり。

「右以雅世卿筆之本ヲ為備へシカ證本ニノ不違一字染愚筆者也またく／＼他見のためにあらず／寛文元年六月吉日 中野市右衛門」

七ウに以下の通り、三種の奥書がある。

ア・「此一帖従近藤義休子借来写畢ノ于時宝曆九年六月二十八日ノ梅  
籠館主人 藤原成烈」

イ・「于時明和三年丙戌六月廿三日従三橋成烈子ノ借来一帖写畢ノ玉  
川館三枝氏源守雄写之」

ウ・「于時明和四年丁亥四月十七日ノ於来涼窓下源能長写」

近藤義休は『新訂寛政重修諸家譜』によれば、江戸の人で称を金八郎。小十人組頭を務めた幕臣で、安永二年に八一歳で没した。その義休所蔵の本を借りた三橋成烈もまた幕臣で、ちょうどこの宝曆九年に黄金一枚を下賜されている(『新訂寛政重修諸家譜』『官府御沙汰略記』)。三枝守雄もまた幕臣で西城御書院番、称を喜之助、平三郎。安永四年に致仕し、寛政一〇年に七七歳で没している。「源能長」については未詳。おそらく幕臣であろう。

【一〇〇】源氏供養表白 写年不明 一冊

林羅山旧蔵 「請求番号特〇九六・〇〇一四」

本資料は源氏供養のために用いられた表白文『源氏供養表白』の仮名本。一冊。綴葉装。

源氏供養とは、鎌倉時代頃から始まった紫式部および『源氏物語』の読者を供養する法会のこと。『源氏物語』に耽溺することを罪深いと捉える

価値観はすでに『更級日記』の中にも見えるが、仏教における「狂言綺語」の考え方が広まるにつれ、妄語の罪によって紫式部が地獄に堕ちたと考えられるようになった。治承三年頃の成立と考えられている『宝物集』には、紫式部墮地獄説話と、源氏供養の流行が記録されている。また、この頃には美福門院加賀の主催で源氏供養が行われた。

『源氏供養表白』には、『源氏物語』の巻名が順に登場するが、これは、表白文を読み上げていくと同時に『源氏物語』を「桐壺」から順に火にくべていったためと考えられている。漢文・仮名文・物語の三種が伝存。本資料はこのうち仮名文に相当し、作者は鎌倉時代の唱導家である安居院法印聖覚と推定されている。聖覚は藤原通憲(信西入道)の孫で、法然を師とし、安居院流唱導を大成した。『尊卑文脈』には「天下の大導師名人」と評されている。

本資料は、綴葉装であるが、もとは袋綴だったものを、袋を開いて裏打ちして改装したもの。表紙もおそらく後補である。本来、表紙に捺印される「昌平坂学問所」の墨印が扉にあり、またこの扉のヤケから見ても、本資料は扉の部分がもとも共紙表紙だったと想像される。これらは近代の修復であろうと想像される。

本資料は林羅山の旧蔵で、のち昌平坂学問所に収蔵された。

【書誌】

外題・「源氏表白」左肩打付墨書

内題・「源氏供養表白」

表紙・香色表紙(二二・〇糎×一五・三糎)

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉七行

字高・八・五糎

墨付丁数・一四丁

印記・「昌平坂学問所」「内閣文庫」「林氏蔵書」「江雲渭水」「浅草文庫」

「日本政府図書」

【写年・書写者】

本文末の奥書は以下の通り。

「以蓮心院殿筆跡不違一字写之／猷什真禅尼者也 法橋兼載」

蓮心院は正親町三条公久のことで、鎌倉時代の公卿。什真禅尼については未詳。「法橋兼載」は、連歌師の猪苗代兼載。会津猪苗代城主の家に生まれながら若くして出家、のち心敬を師として多くの連歌を残した。わずか三八歳で地下連歌師としては最高荣誉の北野連歌会所奉行・宗匠となった。大内政弘ら武家の後援を受けて『新撰菟玖波集』編纂にも参加した。永正七年に五九歳で没。

目録では江戸時代初期の書写としているが、兼載筆と考えれば戦国時代まで遡る。

【一〇一】山頂湖面抄 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇五八」

本資料は『源氏物語』の注釈書『山頂湖面抄』の写本。二巻一冊。

『山頂湖面抄』は、藤原定家によって詠まれたとされる五十四首の巻名歌に注釈を施したものである。序文に拠れば、これらの和歌が初心者によってよく理解されないまま引かれたり、『源氏物語』中の和歌と勘違いしている者も多いために注を施したのだという。『源氏物語』の注釈書という

よりは、『源氏物語』を連歌に読む際の手引書という性格が強い。

序文の年記は文安六年。作者は「比丘尼祐倫」で、『康富記』に拠れば、「源氏読比丘尼」と称された人物。

現存本はあまり多くなく、広く流布したとは言いがたい。但し、当時隆盛を迎えた連歌の側面から、『源氏物語』受容の在り方が見える貴重な資料であるといえる。

本資料は外題・内題ともに「山頂湖面抄」となっており、一般的にこの書名で知られるが、実際には写本によって「水原」（島原松平文庫本）、「源氏目錄之和歌」（神宮文庫本）、「源氏物語歌註」（大東急記念文庫本）等、一定していない。

本資料はほかの写本と比較すると、「夢浮橋」を欠くなど誤脱が多い点が指摘されている。

本資料は和学講談所の旧蔵。

【書誌】

外題・「山頂湖面抄 上下」左肩打付墨書（上下）は朱書

内題・「山頂湖面抄」

表紙・紺色表紙（二六・五糎×一九・二糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一一行

字高・二三・〇糎

墨付丁数・四九丁

印記・書籍館印「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」「内閣文庫」

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。戦国時代～江戸時代初期の書写か。

【一〇二】木芙蓉 写年不明 二冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇一一」

本資料は『源氏物語』の梗概書である『源氏小鏡』の伝本のひとつ。全二冊。

南北朝時代頃に成立したと考えられる『源氏小鏡』はその手軽さから、中世・近世を通して広く流布し、写本・版本ともに多く伝来する。但し、その伝来の過程で、様々な改訂・改作を加えられているため、本によって序・跋・書名に違いがみられる。現在、本文系統は、古態を残す第一系統（古本系）、青表紙本によって改訂された第二系統（改訂本）、増補がみられる第三系統（増補本）、簡略化されている第四系統（簡略本）、和歌よりも梗概に重きを置く第五系統（梗概本）、反対に梗概より和歌の記述が多い第六系統（和歌本）の六種類に整理されている。本資料『木芙蓉』はこのうち第一系統の伝本である。

作者については、紫式部や藤原定家などが比定されてきたが、実際には原形は二条良基の周辺で作られたと考えられている。

本資料は和学講談所の旧蔵。それ以前の旧蔵者のものとみられる蔵書印が二つ（長方陰刻印（四・〇糎×一・三糎）、正方陽刻印（一・五糎×一・五糎））第一丁目右下に捺印されている。

【書誌】

外題・「木芙蓉 上（下）」無地料紙題簽（一八・三糎×三・八糎）

内題・「木芙蓉」

表紙・格子丁子引表紙（二八・〇糎×一八・七糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一〇行

字高・二〇・五糎

墨付丁数・①四七丁、②六一丁

印記・「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」長方陰刻印（四・〇糎×一・三糎）、正方陽刻印（一・五糎×一・五糎）

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。

【一〇三】源氏袖鏡 万治二年刊 一二冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇四二」

拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題①」（『北の丸』第四五号、国立公文書館、平成二五年）参照のこと。

【一〇四】源氏男女装束抄 元禄九年刊 二冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇四五」

本資料は『源氏物語』の装束に関する注釈書『源氏男女装束抄』の元禄九年版である。二巻二冊。袋綴。

『源氏男女装束抄』は書名の通り『源氏物語』に描かれる装束を中心に、有職故実について注記を施したもの。一条兼良の『花鳥余情』の影響下に

成立したもので、物語の読解のためのものというよりは、有職故実の研究書としての性格が強い（序文には「この物かたりをもてあそぶ人のためのみならず、をのつから官しよくをまなふるたよりにもならんかし。」とある。）。

第二冊目の識語によれば、本書は永正十四年、連歌師の宗碩によって編まれた。宗碩は宗祇晩年の高弟で、宗祇の『源氏物語』の注釈研究を継承し且つ独自の研究を確立した。のち、有職故実家の壺井義知が増補し、元禄九年に出版された。

本資料は二巻二冊だが、のちに三冊本も出版されており、多くの版種が伝来する。

本資料は和学講談所の旧蔵だが、各冊遊紙ウラにそれ以前の所蔵者のものとみられる蔵書印が二つ捺されている（円型陽刻印「我友古人」（直径二・五糎）、正方陽刻印「□氏蔵書」（縦横二・二糎）。また、一冊目の一才にも不明印記あり（長方陽刻印（二・七糎×〇・八糎））。

【書誌】

外題・「源氏男女装束抄 上（下）」中央四周双边刷題簽（一三・八糎×三・七糎）

内題・「源氏男女装束抄」

表紙・格子刷毛目布目型押表紙（二二・五糎×一六・五糎）

料紙・楮紙

匡郭・四周单边（一六・八糎×一二・二糎）

行数・每半葉九行

字高・一六・八糎

墨付丁数・①三〇丁、②一七丁

印記・「書籍館印」「大学蔵書」「日本政府図書」「和学講談所」、円型陽

刻印「我友古人」（直径二・五糎）、正方陽刻印「□氏蔵書」（縦横二・二糎）、長方陽刻印（二・七糎×〇・八糎）

【刊年・刊行者】

第二冊目末尾に以下の通り。

「江州客士袖来此抄問予質其品類／疑侶之弁而以平日所考證説答之／因請書書再三予雖固辞強不聴故／略備管見附於本抄之後識似不恥／世之嘲雖然於童蒙初習之人小補／云爾 元禄九年六月十七日」

【一〇五】源氏男女装束抄 享保二年刊 三冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇四八」

本資料は前掲資料『源氏男女装束抄』の享保二年版で、上下巻に後附一巻で全三冊。袋綴。

本資料は後附一巻が増補されている点に加え、享保二年の年記を持つ序文や頭注が追加されており、前掲の元禄九年版と比較すると、新たに版をおこして出版したことがわかる。第二冊目の末にも享保二年の年記で壺井義知の識語が載る。この識語によれば、義知の教えを受けた渡辺康映がそれを元の後附を編集し、義知が出版を許可したことで増補版が完成した。本資料は内務省の旧蔵。

【書誌】

外題・「源氏男女装束抄 上（下・後附）」左肩四周双边刷題簽（二七・二糎×三・五糎）

内題・「源氏男女装束抄」

表紙・紺色表紙（二六・七糎×一八・〇糎）



料紙・楮紙

匡郭・四周单边（二〇・四糎×一三・五糎）

行数・每半葉九行

字高・本文一七・三糎、頭注三・三糎

墨付丁数・①二二丁、②二九丁

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「太政官文庫」

【刊年・刊行者】

第二冊目の識語の年記は、

「享保二丁酉歳初春上澣 壺井義知著」

となつてゐる。続いて、末尾に、

「源氏男女装束抄下終 京師 唐本屋八郎兵衛刊行」

とある。

【一〇六】源氏男女装束抄 文政八年刊 三冊

堀直格旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇四七」

本資料は『源氏男女装束抄』の寛政一二年版を文政八年に再版したもの。

上下巻と後附巻で全三冊。袋綴。

本資料の各冊見返しには「花洒家文庫」の朱印が捺されており、信州須坂藩主堀直格の旧蔵であったことがわかる。堀直格旧蔵本は明治期に政府に献納されており、本資料もそのうちのひとつ。

但し、本資料の「花洒家文庫」は、見返しに直接捺印されたものではなく、別紙に捺印されたものを切り取って貼付したものである。これはおそらく、元々見返しに捺印されていたものを、修復の際に料紙を取り換える

に当たり、元の料紙から切り取って新しい見返しに糊付けしたものと想像される。

【書誌】

外題・「源氏男女装束抄 上（中・下）」左肩四周双边刷題簽（一八・二糎×三・六糎）

内題・「源氏男女装束抄」

表紙・砥粉色花菱艶出表紙（二五・五糎×一八・五糎）

料紙・楮紙

匡郭・四周单边（二〇・八糎×一三・五糎）

行数・每半葉九行

字高・本文一七・二糎、頭注三・六糎

墨付丁数・①二二丁、②二九丁、③二四丁

印記・「花洒家文庫」「日本政府図書」「浅草文庫」

【刊年・刊行者】

第三冊目の二一オ〜二四ウには、「浪華書林吉田松根堂蔵版書目 心齋

橋通安土町北へ入／加賀屋善蔵」と題して、大阪の書肆である加賀屋善蔵

の広告が載っている。裏見返しに刊記があり、

「寛政十二年庚申正月発行／文政八年乙酉十月補刻／書林 大阪心齋橋

通安土町 加賀屋善蔵梓」

とある。

【一〇七】源語秘訣抄 延宝八年刊 一冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇〇九」

本資料は一条兼良による『源氏物語』の秘説『源語秘訣』の延宝八年版本。袋綴。全一冊。

一般的な書名としては『源語秘訣』と呼称される。一条兼良が著した『花鳥余情』には「これにつきて秘訣あり、別にしるすべし」と言及される箇所が複数あり、これら「秘訣」をまとめたものが本書であると考えられている。子の一条冬良に伝授するため作られ、文明九年に授けられたようである。

本資料は、朱書で校合・注記・頭注の書き入れが施されている。「真淵云」で始まる注が多く、賀茂真淵説との比較検討が行われている。なお、本資料の外題は無地料紙の刷題簽（一八・〇糶×四・二糶）に「源語秘訣鈔 全」とあるが、題簽右上に墨書で「真淵翁正考」と補われている。また、朱書だけでなく、一二才には付箋（一〇・五糶×九・五糶）が貼付されている。これは「雑要鈔台図」として『類聚雑要抄』から州浜の図を引用したもの。

なお本資料は明治一二年に政府が購入したもの。見返しの裏側に「明治十二年購求」の朱印が捺されているのが反転して透けて見える。これは本来、遊紙に捺印されていたものを、修復の際に見返しとして表紙裏に貼り付けてしまったため。なお、第一丁目右下には、一・〇糶×一・〇糶の切り取り跡があり、ここに旧蔵者の蔵書印が捺されていた可能性がある。

【書誌】

外題・「源語秘訣鈔 全」左肩無地料紙刷題簽（二八・〇糶×四・二糶）

（※右上に墨書「真淵翁正考」）

内題・「源語秘訣抄」

表紙・紺色表紙（二六・〇糶×一八・八糶）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉九行

字高・一九・〇糶

墨付丁数・二四丁

印記・「明治十二年購求」「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

目録末尾（二ウ）に「延宝八年庚申九月十日」の年記あり。

本文末尾（二四ウ）には以下のような識語、刊記がある。

「花鳥余情の別注此外無之十五ヶ条に加／此一ヶ条者十六ヶ条候十ヶ条之由／承候無所不審候／此一通以後妙華寺関白自筆写之／件一通從准后借給之也／永正十七曆十一月五日 左幕下判／高辻通雁金町永原屋書肆 中村孫兵衛梓」

【一〇八】源語秘訣抄 延宝八年刊 一冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特〇二七・〇〇一三」

本資料は前掲資料『源語秘訣抄』の同版本で、紅葉山文庫の旧蔵書。袋綴。全一冊。

紅葉山文庫の旧蔵と想定され、保存状態が極めて良好。目録末尾（二ウ）には「延宝八年庚申九月十日」の年記があり、版面から見ても前掲資料と同じ延宝八年版である。本文末尾（二四ウ）の「高辻通雁金町永原屋書肆中村孫兵衛梓」の刊記の下には、書肆のものと考えられる円型墨印が捺してある。版木の磨滅も少なく、延宝八年版の初刷かと想像される。但し、表紙・題簽は後補と考えられる。

【書誌】

外題・「源語秘訣鈔 全」左肩四周双辺刷題簽（二七・八糎×三・八糎）

内題・「源語秘訣抄」

表紙・縹色表紙（二五・八糎×一八・〇糎）

見返・「日本政府図書」蔵書票貼付

遊紙・一丁

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉九行

字高・一九・〇糎

墨付丁数・二四丁

印記・「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

前述の通り。

【一〇九】源語秘訣抄 写年不明 一冊

浅草文庫旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇一五」

本資料は延宝八年版を書写した『源語秘訣』の写本。袋綴。一冊。

目録末尾（二ウ）に「延宝八年庚申九月十日」の年記が見え、体裁から見ても延宝八年版の書写であると考えられる。但し、前掲資料とは異なり、本文末尾（二四ウ）には「永正十七年曆十一月五日 左幕下判」の識語があるのみで、書肆の刊記は見当たらない。

なお本資料は、表紙と本文の前後上下が転倒している。綴じる際に誤ったのだろう。

本資料には「浅草文庫」および「日本政府図書」の蔵書印が捺されているが、それ以外の印記は見当たらず、浅草文庫以前の来歴についてははっきりしない。

水損あり。

【書誌】

外題・「源語秘訣」中央打付墨書

内題・「源語秘訣抄」

表紙・金茶色地波刷毛目表紙（二九・〇糎×二〇・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉九行

字高・二〇・五糎

墨付丁数・二四丁

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」

【写年・書写者】

書写者による奥書を持たないため、延宝八年以降の書写であること以外ははっきりしない。

【一一〇】源語秘訣<sup>（マゴ）</sup> 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇一三」

本資料は『源語秘訣』の写本で、校正の朱書が施されたものである。袋綴。一冊。

本資料は目録を持たず、一ウから本文が始まる。

和学講談所の旧蔵だが、二〇ウには円型陽刻印（直径二・八糎）が捺されており、和学講談所以前の旧蔵者のものと想像されるが、詳細は不明。

【書誌】

外題・「源語秘訣 全」左肩四周双辺刷題簽（一七・〇糎×三・七糎）

内題・「源語秘訣」

表紙・栗皮色表紙（二七・三糎×一九・五糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉八行

字高・二四・五糎

墨付丁数・二〇丁

印記・「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」、円型陽

刻印（直径二・八糎）

【写年・書写者】

本文末尾（二〇ウ）には以下の通り識語がある。

「文明十八年四月廿四日／正三位行権中納言兼侍從藤原朝臣二十三歳判

／右者西三条道遥院実隆公以自筆之本書写之畢／正保四曆卯月九日」

筆跡から見るに、正保四年よりも書写年代は下るのではないか。

【一一一】口伝抄 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇〇七」

本資料は一条兼良による『源氏物語』の秘伝書『口伝抄』の写本。袋綴。一冊。

本書は『源語秘訣』から派生して成立したと考えられてきたが、実際には『花鳥口伝抄』から、項目や注記を再検討した上で、十三ヶ条にまとめて作成したものである。文明三年から文明四年の成立と推定されている。伝本には三系統が知られ、本資料の場合は、文明十二年二月に一条冬良に伝授された系統本であることが元奥書から判断される。本資料の外題は左肩に「伏屋のちり」と打付書されてあるのを、朱線で消した左に「口伝抄」と墨書して直してある。

本資料は和学講談所の旧蔵書である。

【書誌】

外題・「口伝抄」左肩打付墨書

内題・「口伝抄」

表紙・縹色唐草文様艶出表紙（二六・〇糎×一九・五糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一二行

字高・二一・〇糎

墨付丁数・四丁

印記・「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」「内閣文庫」

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。筆跡などから見て江戸時代後期の写か。

【一一二】（源氏系図） 写年不明 一冊

浅草文庫旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇五二」

本資料は『源氏物語』の登場人物の系図。綴葉装。一冊。

「太上天皇」（桐壺帝）から始め、『源氏物語』の登場人物を系線で整理し、その解説を記す。本資料は綴葉装で、斐紙を用い、また筆跡も流麗であることから、元は豪華本として作られた『源氏物語』数十冊のうちの零本であることが想像される。現在は共紙表紙となっているが、おそらく元は装飾が施された豪華な表紙が付されていたのではないか。水損あり。浅草文庫収蔵以前の来歴についてははっきりしない。

【書誌】

外題・「源氏系図」中央打付墨書

内題・なし

表紙・共紙表紙（二六・三糎×一八・五糎）

料紙・斐紙

匣郭・なし

行数・每半葉一一行

字高・二一・〇糎

墨付丁数・二〇丁

印記・「内閣文庫」「日本政府図書」「浅草文庫」

【写年・書写者】

筆跡や体裁から見て、江戸時代前期の書写と推定される。

【一一三】掌中源氏物語系図 天保十五年刊 一帖

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇四三」

本資料は『源氏物語』の登場人物の系図を整理したもの。折本。一帖。

氏族を「皇胤」「大臣族」「卿大夫族」に分け、三段に示し、系線を用いて人間関係を整理している。閲覧の簡便さのため、小型の折本にしてある。

作者は国学者の山田常典。村田春門・清水浜臣らに師事し、紀伊新宮藩主水野忠央に仕え『丹鶴叢書』編纂に携わった。序文は田安家侍医で国学者の井上文雄が寄せている。

外題は中央に四周双辺の刷題簽が貼付してあった形跡があるものの、大半が剥がれて欠けている。

本資料は昌平坂学問所の旧蔵。表紙に昌平坂学問所が分類に用いていた「番外書冊」「新刊納本」の墨印が捺されており、また「漫筆雑考」の票が貼付されている。

【書誌】

外題・「掌中源□」（※一部欠）

内題・「掌中源氏物語系図」

表紙・縹色表紙（一七・八糎×六・三糎）

料紙・楮紙

匣郭・なし

墨付丁数・八折

印記・「番外書冊」「漫筆雑考」「新刊納本」「浅草文庫」「日本政府図書」

「内閣文庫」

【刊年・刊行者】

末尾の刊記は以下の通り。

「山田常介著／天保一五甲辰七月発兌 版元 江戸下谷御成道 英文蔵」

青雲堂英屋文蔵は東叡山御用書物所として知られる版元。慶應年間まで活動している。

【一一四】紫家七論 享和二年写 一冊

岡谷正路旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇五〇」

本資料は国学者の安藤為章による『源氏物語』の注釈書『紫家七論』の写本。『栄花物語考』を付す。袋綴。一冊。

『紫家七論』は紫式部や『源氏物語』をめぐる諸問題を七つの項目に立てて論じた注釈で、国学者の安藤為章によって編まれた。彰考館寄人であった為章は徳川光圀の命によって契沖の講義を受け、それをきっかけに、元禄一六年に本書を編んだ。『紫式部日記』等を引用し、紫式部の執筆環境や背景に目を向け、それまで伝説的に捉えられてきた作者について実証的に論じた点が極めて画期的である。

本資料の場合はさらに、為章の著作である『栄花物語考』も付す。本文全体に朱書での校正がみられる。

本資料は政府が明治一二年に購入したもの。書写者である岡谷正路の旧蔵書と想定される。本資料には、国文学研究資料館が所蔵している岡谷正路筆の『厚顔抄』と同じ「川原塚文庫」の印が捺されている。

【書誌】

外題・「紫家七論 栄花物語考 全」左肩四周双边刷題簽(一八・五糎×三・五糎)に墨書

内題・なし

表紙・香色横刷毛目表紙(二七・三糎×一八・七糎)

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一二行

字高・二〇・五糎

墨付丁数・四三丁

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十二年購求」「川原塚文庫」

【写年・書写者】

本資料末尾(四三ウ)には以下の通り奥書がある。

「紫家七論並栄花物語考者借羽倉惟得蔵本写之畢／享和二壬戌夏四月岡谷正路由義」

これによれば岡谷正路の手によって享和二年に書写された。写本を蔵していたという羽倉惟得は国学者で、豊後岡藩校由学館の教授を務めた人物。羽倉(荷田)御風の養子で、加藤千蔭・村田春海に和歌・国学を学んだ。藩命により多くの写本を残している。文政十年に六三歳で没。

【一一五】紫家七論 写年不明 一冊

浅草文庫旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇五一」

本資料は『源氏物語』の注釈書である『紫家七論』の写本。袋綴。一冊。

本資料は前掲資料同様『紫家七論』の写本である。四周单边の匡郭(二・三・〇糎×一五・四糎)の刷られた料紙を用いて写している。無界。版心は黒魚尾・白口で、書名・丁付はない。

外題は左肩に無地の料紙の題簽(一八・五糎×三・六糎)に「源氏七論」と墨書してあるところを、朱書で題簽の右上に「紫家」と訂正してある。

本資料の浅草文庫以前の来歴ははっきりしない。

【書誌】

外題・「源氏七論 全」(※朱書で「紫家」と訂正) 左肩無地料紙題簽(一八・五糎×三・六糎)

内題・「紫家七論」

表紙・紺色表紙(二八・六糎×一九・二糎)

料紙・楮紙

匡郭・四周单边(二三・〇糎×一五・四糎)

行数・每半葉一〇行

字高・二三・〇糎

墨付丁数・三九丁

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。江戸時代後期〜末期の写か。

【一一六】紫家七論 写年不明 一冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇四九」

本資料は『源氏物語』の注釈書である『紫家七論』の写本。袋綴。一冊。每半葉一五行ずつの書写のため行間が狭い。表紙に「番外書冊」の墨印があることから、昌平坂学問所の旧蔵であったことがうかがえる。

【書誌】

外題・「家七論 全」(※一部欠) 左肩四周单边題簽(一六・八糎×三・五糎)

内題・「紫家七論」

表紙・香色表紙(二七・〇糎×一八・七糎)

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一五行

字高・二三・〇糎

墨付丁数・二九丁

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」「番外書冊」

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。

【一一七】源氏外伝 文政一一年写 四冊

和泉伯太藩渡辺家旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇四四」

本資料は熊沢蕃山の手による『源氏物語』の注釈書『源氏外伝』の写本。四冊。袋綴。

『源氏外伝』は儒学者の熊沢蕃山の手によるもので、蕃山の儒教的な価値観で『源氏物語』を評価しているという点で、『源氏物語』の注釈史の中でも特徴的な内容を持つ。当時の儒学者の見方では『源氏物語』は「好色淫乱」との評価が根強かったが、蕃山は王道や礼を説いた書であるとした。但し、こうした考え方は本居宣長をはじめとする国学者からは強く批判されることとなった。

蕃山の執筆当初は全五十四巻であったが、中院通茂がこれを五巻にまとめ、さらに四巻にしたものが流布した。「桐壺」から「藤裏葉」まで。

各冊の遊紙に「嵯峨支流／渡辺文庫」(四周双辺長方陽刻印、四・八糎×二・〇糎)の印が捺されていることから、和泉伯太藩渡辺家の旧蔵書であることがわかる。明治一三年に政府が購入した。第四冊目の末尾には本屋のものとみられる小型の墨印「□清」(※一部欠、長方陽刻印、一・二糎×〇・六糎)が捺されている。

また朱書での校合が加えられている。

【書誌】

外題・「源氏外伝 春(夏・秋・冬)」左肩打付墨書

内題・「源氏外伝」

表紙・紺色表紙(二三・〇糎×一六・〇糎)

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一〇行

字高・一八・五糎

墨付丁数・①五二丁、②三五丁、③三三丁、④四六丁

印記・「嵯峨支流渡辺文庫」「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治

十三年購求」「□清」

【写年・書写者】

本資料には、第四冊目の末尾に以下の通り、六種の奥書がある。

ア. 「源氏物語抄五卷熊沢氏作也全部五十四卷／各抄出之／○中院前内府通茂撰之五卷となせり全部抄出／今出納大蔵方に存也／五卷を今合して四卷とす」(④四四ウ、墨書)

イ. 「源氏物語抄五卷熊沢氏所作也曾聞全部五十四卷／各抄出之／中院前内相通茂公潤色之且扱切於時事者為五冊也／全部抄者今出納大蔵函蔵之乃各冊／内相自以朱批校之本云以執齋之本敬写畢／享保庚子夷

則初九 堯臣」(④四五オ、朱書)

ウ. 「右源氏外伝得諸丹波国篠山松崎神童之所／延享元年甲子夏五月二十七日 湯元禎」(④四五オ、朱書)

エ. 「天明戊申仲秋七 小艸居士収焉」(④四五オ、朱書)

オ. 「余聞熊沢子源氏外伝久矣偶見根公詢許／処々借而謄写徂徠嘗推古今人才焉今讀之／愈滋嘆其識高出人意表若玩源語者讀之／其益非淺小也但体裁非外伝考之跋中乃非／旧称欲更名曰源語評 于時／天明戊申抄冬 兎道山樵隄識」(④四五ウ)

カ. 「右源氏外伝はじめよりわかなの下にいたる／大関括囊翁蔵本をもてかたはら朱書の／校合并朱跋うつし畢ぬ且あかしより／末紙の墨跋ともに括囊の蔵本にもれ侍りぬ／于時文政十一のとし卯月初八日／花鷹園」(④四六ウ、墨書)

オまでは元奥書で、ここまで同じ内容を持つ写本の存在がすでに知られている(宮内庁書陵部所蔵本や尊経閣文庫所蔵本など)。

カが本資料の書写者の手によるものであるが、「花鷹園」については伝未詳。「大関括囊翁」は下野黒羽藩主大関増業のこと。増業は藩の財政改革・文武奨励・産業振興などに努めるものの、家臣たちの抵抗に遭い、隠居。隠居後に「括囊齋」と号し、国学・神道などを研究、特に医学書や科学技術関係の書物の編纂に業績を残している。

【一一八】(源氏かんよう) 写年不明 一冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇四六」

本資料は『源氏物語』の梗概書である『源氏肝要』の写本。一冊。綴葉装。



『源氏肝要』は、『源氏物語』全五十四帖を「桐壺」から順にあらすじをまとめたもの。本文の引用ではなく作者のことばで平易な解説がされているが、独自の解釈も多い。室町時代の成立と考えられているが、作者共に未詳。

伝本としては、本資料のほかに、神宮文庫・東海大学桃園文庫の蔵本が知られる。

本資料は、厚手の斐紙に雲母引きの料紙を用いた写本。題簽（七・八糎×二・三糎）は浅葱色の料紙に金泥で秋草文様を施したもの。紅葉山文庫の旧蔵と想定され、蔵書印は「日本政府図書」「内閣文庫」のほかにない。見返しに「日本政府図書」蔵書票が貼付されている。

【書誌】

外題・「源氏かんよう」左肩浅葱色地金泥秋草文様題簽（七・八糎×二・三糎）に墨書

内題・なし

表紙・縹色表紙（二四・八糎×一八・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一〇行

字高・一八・〇糎

墨付丁数・六九丁

印記・「日本政府図書」「内閣文庫」

【写年・書写者】

筆跡や体裁などから見て、江戸時代前期の写。

【一一九】源氏物語之詞并歌抄出（ことなし草）写年不明 一冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇〇四」

本資料は『源氏物語』の梗概書『源氏物語之詞並歌抄出』の写本。一冊。袋綴。横本。「桐壺」から「宿木」までの残欠本である。

作者の言葉であらすじを述べる前掲書とは異なり、本書の場合は、本文を引用して繋ぎ合わせることで物語をまとめている。成立は室町時代後期と想定されているが、作者は未詳。中世に多く成立した梗概書のひとつであるが、伝本は東海大学桃園文庫蔵本のほかはあまり知られていない。

本資料には「秘閣図書之章」の印が捺されており、紅葉山文庫旧蔵であると推定される。遊紙に「日本政府図書」の蔵書票が貼付されている。

【書誌】

外題・「古登奈志草 全」左肩無地料紙題簽（九・七糎×二・三糎）

内題・「源氏物語之詞并歌抄出 ことなし草と云」

表紙・縹色卍字繫艶出表紙（二四・〇糎×二二・五糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一四行

字高・一一・〇糎

墨付丁数・六一丁

印記・「日本政府図書」「内閣文庫」「日本政府図書」（蔵書票）

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。

【一二〇】〔源氏物語抜書〕 写年不明 三冊

浅草文庫旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇一九」

本資料は、熊沢蕃山の手による『源氏物語』の注釈書『源氏外伝』の写本。三冊。

もとは四冊本であったもののうち、第三冊が欠け、現在は三冊のみ伝わる。本資料は外題に「源氏物語抜書」とあるが、多くの写本が伝わる『源氏外伝』のうち、この異称を持つものは珍しい。

蔵書印は「日本政府図書」「浅草文庫」の二種が捺されている。浅草文庫収蔵以前の来歴ははっきりしない。

【書誌】

外題・「源氏物語抜書」左肩無地料紙題簽に墨書（二五・五糎×三・五糎）

内題・なし

表紙・金茶色地格子刷毛目表紙（二五・〇糎×一八・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一〇行

字高・二〇・八糎

墨付丁数・①四九帖、②四八丁、③五一丁

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」

【写年・書写者】

本資料は前掲の『源氏外伝』（請求番号二〇三・〇〇四四）と異なり、元奥書・奥書を持たない。写年・書写者ともに不明。

【一二一】〔六帖源氏〕 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇五四」

本資料は『源氏物語』の補作『雲隠六帖』の写本。一冊。袋綴。別名に「源氏物語雲隠」「雲がくれの巻」等。

『雲隠六帖』は、『源氏物語』に欠けている部分を補った続編で、室町時代に成立したと考えられている。光源氏の出家とその死を描いた「雲隠」、宇治十帖を補う「巢守」「桜人」「法の師」「雲雀子」「八橋」の全六帖。清少納言・清原元輔・赤染衛門らが作者に擬せられてきたが、伝説の域を出ない。

本資料は和学講談所の旧蔵である。

【書誌】

外題・「六帖源氏」左肩無地料紙題簽（二七・八糎×三・五糎）

内題・なし

表紙・香色布目型押表紙（二七・三糎×二〇・〇糎）

扉・左肩に「源氏物語 六帖」と墨書

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一三行

字高・二四・〇糎

墨付丁数・二〇丁

印記・書籍館印「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料は奥書を持たず、写年・書写者についてもはっきりしない。

【一二二】〔雲隱〕 享和二年写 一冊

大田南畝旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇五七」

本資料は、前掲資料同様『源氏物語』の補作『雲隱六帖』の写本。一冊。袋綴。

本資料の外題は「雲隱」だが、本文は「雲隱」から「八橋」までの六帖。本資料は大田南畝の旧蔵書で、一才に「南畝文庫」の朱印が捺されている。三八才から三八ウにかけて自筆の跋文あり。のち昌平坂学問所に収蔵された。

【書誌】

外題・「雲隱」左肩打付墨書

内題・なし

表紙・香色表紙（二六・三糎×一九・二糎）

扉・左肩に「源氏物語 六帖」と墨書

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一〇行

字高・二二・〇糎

墨付丁数・三八丁

印記・「昌平坂学問所」「日本政府図書」「浅草文庫」「南畝文庫」

【写年・書写者】

本資料には三段階の奥書があり、それぞれの年記は以下の通り。

ア．「康平元戊戌曆正月日 石山寺住持 大僧都信譽」（三七才）

イ．「元応元年九月二日 正二位権中納言 藤原親兼」（三七ウ）

ウ．「享和二のとし神無月廿一日時雨のはれし朝 杏花園叟書」（三八ウ）

ア・イの元奥書は『雲隱六帖』の写本に共通するもの。ウは南畝手跋の年記。

【一二三】日本紀の御局の考 文政六年写 一冊

旧蔵者不明 「請求番号一五八・〇二五六」

本資料は国学者の藤井直尚の手による『源氏物語』の注釈書『日本紀御局考』の写本。一冊。袋綴。

『紫式部日記』に一条天皇が紫式部を評して「日本紀御局」と呼んだことについて、その典拠や「日本紀」について考察を述べる。また物語成立における歴史的背景を考察し、物語の准拠について論じている。

作者の藤井高尚は備中吉備津神社の神官で、本居宣長に教えを受けた国学者。自跋の年記は文化八年となっているが、文化六年の刊記を持つ版本も存在する。版本にはほかに文化八年版・文化一〇年版等が知られる。本資料にも版本と同じ文化八年の自跋、文化九年の識語が書写されている。

本資料は版心に「知栄堂蔵」とある有界の料紙に書写されている。題簽に瓢箪型の朱印「勝野」（二・八糎×一・〇糎）、一才に「勝野家蔵」（二・五糎×二・〇糎）の陽刻朱印が捺されている。

【書誌】

外題・「日本紀の御局の考 完」左肩無地料紙題簽（一四・五糎×二・七糎）に墨書

内題・「日本紀御局考」

表紙・縹色表紙（二三・二糎×一六・五糎）

料紙・楮紙

匡郭・四周单边（一八・三糎×一三・三糎）、有界

行数・每半葉一一行

字高・一八・三糎

墨付丁数・一一丁

印記・「日本政府図書」「勝野家蔵」（陽刻朱印、二・五糎×二・〇糎）「勝

野」（瓢箪型陽刻朱印、一・八糎×一・〇糎）

【写年・書写者】

一ウに以下の通りの朱書あり。

「此書は光幸参乃所蔵を乞得て写しおけるなり／文政六末のとし二月委懐堂主人」

「委懐堂主人」については来歴がはっきりしないが、明治一五年に政府が購入した『三奇一覽』（請求番号二〇六・〇六〇〇）の第一丁目に以下の通りの識語がある。

「文化十二亥初冬至同十三子仲春／倉城三郭旅寓中抄録／委懐堂主人」

この『三奇一覽』には、本資料と同じ「勝野家蔵」（陽刻朱印、二・五糎×二・〇糎）「勝野」（瓢箪型陽刻朱印、一・八糎×一・〇糎）の二種の印が捺されている。捺印場所もそれぞれ第一丁目と表紙で、本資料と同じ。従ってこれらの印は「委懐堂主人」のものとして想定される。

【一二四】源氏物語玉のみすまる 文化年間写 一六冊

荒木田（井面）守訓旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇四〇」

本資料は国学者の荒木田守訓による『源氏物語』の注釈書『源氏物語玉のみすまる』の自筆稿本である。一六冊。袋綴。

項目を五十音順に配列、語句毎に詳しい解説を施し、本文を引用して用例を示す。実用的な『源氏物語』の「辞書」として編集されたもの。自序によれば、文化十年十二月に草稿を終え、翌十一年二月に完成した。

荒木田（井面）守訓は本居宣長・春庭に教えを受けた国学者で、伊勢内宮一禰宜を務めた。天保一三年に七六歳で没。

本資料は守訓の自筆稿本で、改稿の際に用いた附箋や、添削の跡などが多く残り、編集過程の様子をうかがわせる。

表紙は後補と考えられるが、打付け書で「阿 瓊乃御須磨流 一」（第一冊目）とあり、右肩に項目、左肩に外題を記す。

裏表紙には子孫の荒木田（八羽）光謙の識語が打付け書されている。内容は以下の通り。

「荒木田光謙蔵／右壺拾陸卷有井面故／祖卿稿本也今歳乞之／守国神主為蔵本纔修破標長伝無窮者矣／嘉永三年庚戌四月下六日」

これによれば現在の表紙はこのときに付されたものと想像される。見返しには反古紙が多用されている。

荒木田（八羽）光謙は、伊勢内宮祠官であった荒木田（八羽）光穂の長男で、伊勢内宮権禰宜を務めた国学者である。本資料の第一丁目に捺されている「八羽蔵書」の印は、光謙の蔵書印と想像される。

蔵書印はほかに「日本政府図書」「大日本政府図書」「内閣文庫」「明治十二年購求」の印に加え、不明印記「□茂」（長方陽刻朱印、一・八糎×一・二糎）。

本資料は香色の帙（二五・三糎×一八・〇糎×九・〇糎）二箱に保管されている。乾・坤の二箱にそれぞれ七冊・九冊ずつ。帙は左肩に無地の料

紙の題簽（一七・二糶×三・〇糶）が貼付されており、それぞれ「源氏物語玉のみすまる 乾（坤）」と墨書されている。

なお本資料は明治十二年に政府が購入した。

【書誌】

外題・①「阿 瓊乃御須磨流 一」、②「伊宇 瓊乃美春麻留 二」、③「衣於 玉農御寸摩流 三」、④「加 多摩濃美須婆留 四」、⑤「岐久計 太満能美春破流 五」、⑥「己 珠乃見須婆留 六」、⑦「佐志 珠乃民寸麻留 七」、⑧「春勢 珠乃民寸麻留 八」、⑨「太智 多麻乃御珠磨流 九」、⑩「都□（イ十弓） 登 多摩乃御春万流 十」、⑪「南邇努禰能 瓊濃美春萬琉 十一」、⑫「麻美 玉乃御統（「統」の最終画が欠画） 十三」、⑬「破飛布辺保 当末乃御寸万留 十二」、⑭「武女毛 玉乃御寸末留 十四」、⑮「矢由与 堂満農民春萬流 十五」、⑯「羅梨琉礼呂 和韋恵表 玉乃御寸末留 十六 止」（※すべて打付墨書）

内題・「源氏物語玉のみすまる」

表紙・香色地横刷毛目表紙（二四・八糶×一六・八糶）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉八行

字高・本文二〇・〇糶、頭注三・五糶

墨付丁数・①六五丁、②六三丁、③四六丁、④五九丁、⑤五〇斤、⑥四九丁、⑦五八丁、⑧五〇丁、⑨三四丁、⑩五一丁、⑪四二丁、⑫六〇丁、⑬三八丁、⑭四〇丁、⑮五〇丁、⑯三二丁

印記・「八羽蔵書」「日本政府図書」「大日本帝国図書印」「内閣文庫」「明治十二年購求」「■茂」（長方陽刻朱印、一・八糶×一・二糶）。

【写年・書写者】

前述の通り、本資料は荒木田守訓の自筆稿本である。自序によれば、文化十年十二月に草稿を終え、翌十一年二月に完成したとあるので、文化年間の書写であることがわかる。

【一二五】（さころも） 江戸時代初期写 四冊

和学講談所旧蔵 「請求番号特一一七・〇〇〇一」

『狭衣物語』は主人公の貴公子狭衣の恋愛遍歴を描いた平安時代王朝物語のひとつ。袋綴。四冊。

『源氏物語』の強い影響下にあり、特に宇治十帖をなぞるような内容となっている。狭衣の造形は薫、飛鳥井君の造形は浮舟を参考にしていると思われる。物語の結末そのものも「夢浮橋」に近似しており、作者が意図的に『源氏物語』を参考にしていたと考えられる。作者は、古くは紫式部の娘である大式三位などに比定されていたが、現在では、源頼国女が有力であるとされている。

本資料は日本古典文学大系の底本。本資料は第一巻の末尾が諸本と異なり、入水を企てた飛鳥井君をその兄が助け、京に住むおばに託すという展開になっている。この部分は前後の記述とも矛盾を含むため、後世に書き加えられたものと考えられている。

本資料の表紙は天に青、地に紫の雲を引いた雲紙を用いている。題簽は唐花文様を雲母刷した料紙。

本資料は和学講談所の旧蔵。江戸時代初期の書写か。

【書誌】

外題・「さころも 一（四）」中央香色地唐花文様雲母刷料紙題簽に墨

書

内題・なし

表紙・雲紙表紙（二六・〇糎×一八・五糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一一行

字高・二二・〇糎

墨付丁数・①八五丁、②九〇丁、③一一六丁、④一二二丁

印記・書籍館印」「浅草文庫」「和学講談所」「日本政府図書」「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料は奥書を持たない。写年・書写者ともに不明。

【一二六】狭衣 元和年間刊か 八冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号特一一七・〇〇〇二」

本資料は『狭衣物語』の古活字版。袋綴。八冊。

本資料に刊記はないものの元和年間の出版と推定され、川瀬一馬氏（『増補古活字版之研究』、昭和四二年）の分類においては無刊記口種本と称されるものである。元和九年版の再版本と考えられている。

本資料の見返し部分には川瀬一馬氏筆の付箋（二五・八糎×八・〇糎）が貼付されている。「狭衣古活字ハ数種アリ」として三例を挙げ、年記は「昭和五年夏」となっている。

本資料の表紙および本文末尾には「昌平坂学問所」の墨印がある。また末尾に「文政癸未」の朱印があり、文政六年に新収されたことがうかがわ

れる。

本資料の第一冊目は朱の書き入れがある。全体に水損あり。袋綴が開いている箇所が多い。

【書誌】

外題・「狭衣 一（〜八）」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）

内題・「狭衣」

表紙・香色表紙（二七・〇糎×一九・八）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一二行

字高・二二・〇糎

墨付丁数・①五〇丁、②三六丁、③四〇丁、④五〇丁、⑤六一丁、⑥七

〇丁、⑦七九丁、⑧四九丁

印記・昌平坂学問所」「日本政府図書」「浅草文庫」「文政癸未」「大学蔵書」

【刊年・刊行者】

本資料は刊記を持たないため、正確な刊年・刊行者は不明。但し活字や版式から元和九年版の再版本と想定される。

【一二七】狭衣 承応三年刊 一六冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇五九」

拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題①」（『北の丸』第四五号、国立公文書館、平成二五年）参照のこと。

【一二八】狭衣 承応三年刊 一三冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇六〇」

拙稿「当館所蔵の「絵入り本」 解題①」『北の丸』第四五号、国立公文書館、平成二五年）参照のこと。

【一二九】和泉式部物語 享保二二年刊 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇一三五」

拙稿「当館所蔵の「絵入り本」 解題①」『北の丸』第四五号、国立公文書館、平成二五年）参照のこと。

【一三〇】多武峯少将物語考證 文政八序刊 一冊

大学校・大学旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇七六」

右少将藤原高光の突然の出家を描いた物語『多武峯少将物語』の注釈書。袋綴。一冊。

『多武峯少将物語』は右少将藤原高光の突然の出家を、高光の妻や同母妹の愛宮の悲嘆を中心に和歌の贈答から描いたもの。『栄花物語』にも同様の記事がみられ、高光の出家が当時大きな事件として扱われたことがうかがえる。作者については『蜻蛉日記』との関係性から藤原道綱母が比定されるが、高光・愛宮・高光妻に近侍した女性の手によるものと考えられ

ている。

本資料はその『多武峯少将物語』の注釈書で、序文には文政八年の年記がみられる。作者は「本伝」の署名から丸林孝之という人物であることがわかるが、彼の来歴については岸本由豆流の門人と推定されている。〔慶長以来国学家略伝〕以外にははっきりしない。識語を寄せている座頭麻績一・山崎知雄は同門。

識語は本来、本文の後ろに入るはずだが、本資料の場合、序文の前に来ている。

本資料は外題として中央に題簽が貼付されていたようだが、現在は欠けている。また第一丁目には蔵書印「日本政府図書」「浅草文庫」「大学校図書之印」のほか「廣書乘蔵」（五・〇糎×三・七糎）、不明印記あり。

【書誌】

外題・欠

内題・「多武峯少将物語考證」

表紙・薄墨色地雷紋繫艶出表紙（二七・〇糎×一八・二糎）

料紙・楮紙

匡郭・四周单边（二四・〇糎×一五・〇糎）

行数・每半葉一一行

字高・二四・〇糎（本文一六・五糎、頭注六・五糎）

墨付丁数・三三丁

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」「大学校図書之印」「廣書乘蔵」（五・〇糎×三・七糎）

○糎×三・七糎）「■」（不明印記、陰刻、二・〇糎×一・二糎）

【刊年・刊行者】

序文等の年記から文政八年頃の成立・刊行であることが推定される。版元等の記載は見えない。

【一三一】多武峯少将物語考證 文政八序刊 一冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇七五」

本資料は前掲資料の同版本。袋綴。一冊。

前掲資料とは識語の位置が異なっている。松原一義編『多武峯少将物語校本と注解』（桜楓社、平成三年）には本資料の影印が掲載されている。

解題には「香色地に無文様の表紙」と紹介されているが、実際は朱色地に唐草文様の艶出。経年のため色・文様ともに薄くなっている。

本資料の場合、識語が本文末に載る。

本資料は明治一二年に政府が購入したものである。

【書誌】

外題・「多武峯少将物語」中央四周単辺刷題簽（一六・三糎×三・二糎）

内題・「多武峯少将物語考證」

表紙・朱色地唐草文様艶出表紙（二七・〇糎×一八・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・四周単辺（二四・〇糎×一五・〇糎）

行数・每半葉一一行

字高・二四・〇糎（本文一六・五糎、頭注六・五糎）

墨付丁数・三三丁

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十二年購求」

【刊年・刊行者】

前掲資料同様、序文等の年記から文政八年頃の成立・刊行であることが推定される。版元等の記載は見えない。

【一三二】浜松中納言物語 写年不明 四冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇七三」

本資料は平安時代に成立した物語『浜松中納言物語』の写本。全四冊。袋綴。

『浜松中納言物語』は亡父が唐の第三皇子に転生していると知った主人公が唐に渡り、皇子の生母である唐后と恋に落ちるといふ物語。夢や輪廻転生をモチーフとして複雑な世界を描いており、『更級日記』との関係性が古くから指摘されている。御物本『更級日記』には藤原定家の筆で菅原孝標女を作者とする説が記されているが、諸説あつてはつきりしない。

首巻が散逸しており、現存する写本は本資料を含め四巻四冊本が多い。巻五を持つ写本も伝わるが、諸本間の異同は多くないことが特徴である。

本資料は每半葉一〇行の写本で、近世中期頃の書写と推定される。横刷毛目の表紙で、松葉散らしの題簽に外題が墨書されている。

本資料は和学講談所の旧蔵。①第一丁目の右下に不明陽刻印あり。

【書誌】

外題・「浜松中納言物語 一（〜四終）」中央松葉散文様題簽（二四・〇糎×二・三糎）に墨書

内題・「浜松中納言」

表紙・横刷毛目表紙（二三・〇糎×一七・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一〇行



字高・一八・〇糎

墨付丁数・①七五丁、②六五丁、③七〇丁、④八一丁

印記・「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」  
（不明印記、正方陽刻印、一・〇糎×一・〇糎）

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。江戸時代中期頃か。

【一三三】 浜松中納言物語 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇七八」

本資料は『浜松中納言物語』の写本だが、冒頭の巻一・巻二部分を欠く。  
一冊。袋綴。

前掲資料が、主人公が渡唐する巻一から始まるのに対し、本資料は主人公が帰国する巻三から始まる。毎半葉一四行という密な書写。朱書で校正が加えられている。

【書誌】

外題・「浜松中納言物語」 左肩四周双边刷題簽（二七・〇糎×三・五糎）  
に墨書

内題・「浜松中納言物語」

表紙・香色表紙（二七・五糎×一八・八糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・毎半葉一四行

字高・二二・〇糎

墨付丁数・七一丁

印記・「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。江戸時代中期～後期の書写か。

【一三四】 堤中納言物語 天保五年写 一冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇七九」

本資料は短編物語集『堤中納言物語』の写本で、幕臣の大野広城の奥書を持つもの。袋綴。一冊。

『堤中納言物語』は短編物語一〇編と未完の一編を収めた物語集だが、書名の由来や作者についてもはっきりしない。収録されている物語のうち「逢坂越えぬ権中納言」だけは、天喜三年の成立であることがわかっている。また「花桜折る少将」「ほどの懸想」「貝あはせ」「はいずみ」は、文永八年に成立した『風葉和歌集』に和歌が引かれているため、これ以前の成立であることがわかる。およそ平安時代後期から鎌倉時代にかけて現在の形になっていったものか。

多くの写本が伝来しているが、およそ近世以降の書写で、それ以前に書写された完本はいまだ確認されていない。本資料も天保年間の書写で、奥書によれば大野広城の手によるものである。

幕臣の大野広城は幕府に伝わる武家故実を『殿居囊』『青標紙』等の著作にまとめたが、本来秘匿されるべき幕府の法令等を印刷・出版したことを咎められ、天保一二年に処罰されて綾部藩に永預となり、まもなく没した。

本資料は昌平坂学問所の旧蔵で、元治元年に新収されたもの。

【書誌】

外題・「堤中納言物語」左肩打付墨書

内題・「堤中納言物語」

表紙・横丁子引表紙（二六・五糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉九行

字高・二〇・五糎

墨付丁数・八五丁

印記・「日本政府図書」「大学蔵書」「浅草文庫」「内閣文庫」「昌平坂学問所」

「元治甲子」

【写年・書写者】

本資料の奥書（八五ウ）は以下の通り。

「天保五年九月得校本再令書写了／大野広城」

これによれば天保五年、大野広城の手による書写。

【一三五】とりかへはや 文政一〇年写 四冊

温故堂文庫旧蔵 「請求番号二〇三・〇一四八」

本資料は平安時代末期に成立した物語『とりかへばや物語』の写本。袋綴。四冊。

『とりかへばや物語』は、関白左大臣の若君と姫君が互いに入れ替わり、朝廷に出仕することから始まる物語で、それまでの王朝物語の影響を受け

つとも性別を取り換えるという特異な設定を持つ。書名は父大臣が嘆息して言う「とりかへばや（息子と娘を取り換えたいなあ）」という言葉から。もとは「古とりかへばや」とも言うべきプロトタイプが流布していたようだが、のちに改作された「今とりかへばや」が現行の形の基礎となつて広まった。多くの写本が伝わっているが、中世以前に遡るものは確認されていない。

本資料は塙家の温故堂文庫の旧蔵である。また本文中に書写者による書き入れがある。

【書誌】

外題・「とりかへはや 一（〜四）」中央黄檗色料紙題簽（一八・五糎×

四・〇糎）

内題・「とりかへはや」

表紙・松葉色格子刷毛目表紙（二九・〇糎×二〇・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一〇行

字高・二一・五糎

墨付丁数・①八〇丁、②三四丁、③七五丁、④八一丁

印記・「日本政府図書」「内閣文庫」「温故堂文庫」

【写年・書写者】

④八一才に以下の通り、奥書あり。

「右とりかへはや四卷正木千幹みつからしるし／おける書もてふたゝひ写しぬ文政十年やよいなか／の三日かきをえつ／東山人芳麿」

これによれば書写者は、幕臣で国学者の福居芳麿（号を東山人）。歌人で文政六年に没した正木千幹の旧蔵書から本資料を書写したとみられる。

【一三六】とりかへはや 文久元年写 四冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇三・〇一三三」

本資料は平安時代末期成立の物語『とりかへばや物語』の写本。袋綴。四冊。

本資料には「高月／所蔵」の陽刻印が捺されているが、旧蔵者に関しては不明。同じ印が早稲田大学図書館が所蔵している『無名抄』にもみられる。

本資料は明治一三年に政府が購入したもの。

【書誌】

外題・「とりかへはや 一（〜四）」左肩無地料紙題簽（一四・〇糶×二・五糶）に墨書

内題・「とりかへはや」

表紙・紺色布目型押表紙（二三・三糶×一六・五糶）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一二行

字高・二〇・〇糶

墨付丁数・①三九丁、②二〇丁、③四〇丁、④三八丁

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十三年購求」「高月所蔵」

【写年・書写者】

第四冊目の裏見返に以下の通り記載がある。

「文久元年霜月下旬／高月氏」

本資料は文久元年に蔵書印の持ち主である「高月氏」が書写したとみら

れる。

【一三七】住吉物語 慶長年間刊 一二冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特〇一〇・〇〇〇三」

本資料は平安時代成立の物語『住吉物語』の古活字版本。袋綴。上下二冊。

『住吉物語』は、典型的な継子いじめの物語で、成立は『源氏物語』以前であるが、現存する本文は鎌倉時代に改作されたものであると考えられている。

主人公の姫君には惹かれあう四位少将という人物がいたが、継母に妬まれて引きさかれてしまう。姫君はやむなく亡き母の乳母を頼って住吉に逃れる。四位少将は姫君を探し、ついに長谷寺で夢想を得て姫君と再会する。

『住吉物語』は長い間最も人々に読まれてきた本と称しても良いほど、

伝本・異本が数多く、近世期を通して刊行され続けた。本資料はそのうちでも初期の出版で、第一種古活字版として知られるものである。（川瀬一馬『増補古活字版之研究』、昭和四二年）

本資料は紅葉山文庫の旧蔵。第一冊目地に水損あり。

【書誌】

外題・「住吉物語 上（下）」

内題・「住吉物語」

表紙・香色雷文繫型押表紙（二五・五糶×一九・五糶）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・二一・〇糎

墨付丁数・①四五丁、②三一丁

印記・見返しに「日本政府図書」の蔵書票貼付

【刊年・刊行者】

本文末尾(②三一才)に以下の通り刊記あり。

「住吉物語依少人御所望以秘本興行也」

第一種古活字版『竹取物語』に同種の刊記があり、同じ慶長年間の刊行と推定されている。(川瀬一馬『増補古活字版之研究』、昭和四二年)

【一三八】住吉物語 慶長年間刊 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号特一一九・〇〇〇六」

本資料は前掲第一種古活字版『住吉物語』の同版本。袋綴。一冊。

本資料は前掲と同じ版だが、合冊されて上下巻一冊になっている。また、比較的新しい栗皮色(織)の帙(二七・〇糎×二〇・八糎×二・三糎)に収められている。帙の左肩には無地の料紙に「住吉物語 古活字第一種本」と墨書した題簽(一八・二糎×三・五糎)が貼付されている。

本資料は和学講談所の旧蔵である。

【書誌】

外題・「住吉物語 上(下)」

内題・「住吉物語」

表紙・代赭色表紙(二六・五糎×二〇・〇糎)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・二一・〇糎

墨付丁数・七六丁

印記・内閣文庫「書籍館印」「浅草文庫」「和学講談所」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

本文末尾(七六才)に以下の通り刊記あり。

「住吉物語依少人御所望以秘本興行也」

活字の形状を見ても前掲資料と同版と判断される。

【一三九】住吉物語 元和・寛永年間刊 二冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号特一一九・〇〇〇五」

本資料は平安時代に成立した物語『住吉物語』の古活字版本。袋綴。上下二冊。

本資料は第三種古活字本に分類されるもので、第一種・第二種と比較すると使用されている活字・行数など大きく異なるが、それ以上に、本文系統を異にし、全く別の写本を底本として刊行されたものである。(川瀬一馬『増補古活字版之研究』、昭和四二年)活字そのものが小さく、また毎半葉一二行と密である。

香色の元表紙の上に、新しい格子丁子引の表紙が付けられているため、表紙が二重になっている。外題もそれぞれの表紙に打付書されている。外題の筆跡は異なる。

本資料は昌平坂学問所が文政六年に新収した資料である。

【書誌】

外題・(改)「住吉物語 上(下)」左肩打付墨書、(元)「住吉物語 上(下)」内題・「住吉物語」

表紙・(改) 格子丁子引布目型押表紙、(元) 香色表紙 (ともに二七・〇糎×一九・五糎)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一二行

字高・二二・五糎

墨付丁数・①二九丁、②二〇丁

印記・「内閣文庫」「浅草文庫」「日本政府図書」「昌平坂学問所」「文政癸未」

【刊年・刊行者】

本資料は刊記を持たないため、正確な刊年・刊行者は不明。第一種・第二種本に比べて時代が下ると考えられ、元和・寛永年間の刊行と推定されている(川瀬一馬『増補古活字版之研究』、昭和四二年)。

【一四〇】「住吉物語」 江戸時代初期写 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇一四五」

本資料は平安時代に成立した物語『住吉物語』の写本。袋綴。一冊。

縦三〇・〇糎の大本で、字高も二五・〇糎ある。筆跡から見て江戸時代初期の書写であると想像される。

全体に水損がみられ、欠けている箇所もあるが、すでに修理されている。

裏見返の右下に万年筆の文字で「昭和十一年十一月修理」と記載がある。

本資料は和学講談所の旧蔵である。

【書誌】

外題・「すみよし物語」左肩打付墨書

内題・なし

表紙・香色布目型押表紙(三〇・〇糎×二〇・八糎)

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一三行

字高・二五・〇糎

墨付丁数・三九丁

印記・書籍館印「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」「和学講談所」

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、正確な写年・書写者は不明。

【一四一】「住吉物語」 天明元年写 一冊

伴直方旧蔵 「請求番号二〇三・〇一四四」

本資料は『住吉物語』の写本で、校合が加えられているもの。袋綴。一冊。

本資料は国学者の羽根満主賀(真清・満須賀)によって校合が加えられた写本である。奥書によれば、校合に用いたのは「字毎にほりておしたる古本」(古活字版か)「大宮司家の本」「畑井かもたる本」の三本と「今本」で、「字毎にほりておしたる古本」を底本にし、朱書でそれぞれの本と比較し、朱や小字を用いて校合した。

羽根満主賀は伊勢度会の人で、荒木田久老を師とする。寛政元年に没。

本資料は伴直方の旧蔵で、「伴氏家印」の蔵書印が第一丁目に捺されて

いる、のち、元治元年に昌平坂学問所に所蔵された。

【書誌】

外題・「住吉物語 校正本 完」左肩打付墨書  
内題・なし

表紙・浅葱色表紙（二七・五糎×一九・五糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一〇行

字高・一九・五糎

墨付丁数・五三丁

印記・「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」「伴氏家印」「庄平左が学問所」「元治甲子」

【写年・書写者】

本文末尾の五二ウゝ五三オにかけて奥書あり。これによれば、天明元年四月から閏五月にかけての書写で、羽根満主賀の手によるもの。

【一四二】木草物語 写年不明 四冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇四・〇〇六三」

本資料は安永年間頃に成立した物語『木草物語』の写本。袋綴。四冊。

『木草物語』は、歌人で高崎藩土宮部義正の妻であった宮部万によって書かれた長編物語である。書名は登場人物がすべて草花の名前に基づくことから付けられたと類推される。王朝時代を舞台とし、帝・中宮・女御・左右大臣など、高貴な人々の複雑な人間関係が和歌を軸に描かれる。『源

氏物語』の影響を強く受け、構成や物語展開だけでなく、語彙や文体まで類似している。

宮部万は宝暦頃に、国学者でもあった夫の勧めで冷泉為村に入門し、歌人として研鑽を積むと同時に『源氏物語』をはじめとする王朝文学を学ぶようになった。こうした中で、自身の詠歌をまとめた『万女詠草』を編むと同時に、『木草物語』にも着手したと考えられ、安永年間には完成していたと推定されている（『木草物語』古典文庫、昭和五二年）。

本資料は和学講談所の旧蔵。

【書誌】

外題・「木草物語 春（〜冬）」中央打付墨書

内題・「木草物語」

表紙・香色表紙（二七・七糎×一八・七糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉七行

字高・二〇・〇糎

墨付丁数・①四四丁、②六〇丁、③五九丁、④七二丁

印記・書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料は奥書を持たず、写年・書写者ともに不明。

（調査員）